

香川大学 広報誌

かかアド

KAGAWA UNIVERSITY AD Vol.035 2021 WINTER

35

THE 35th. ISSUE

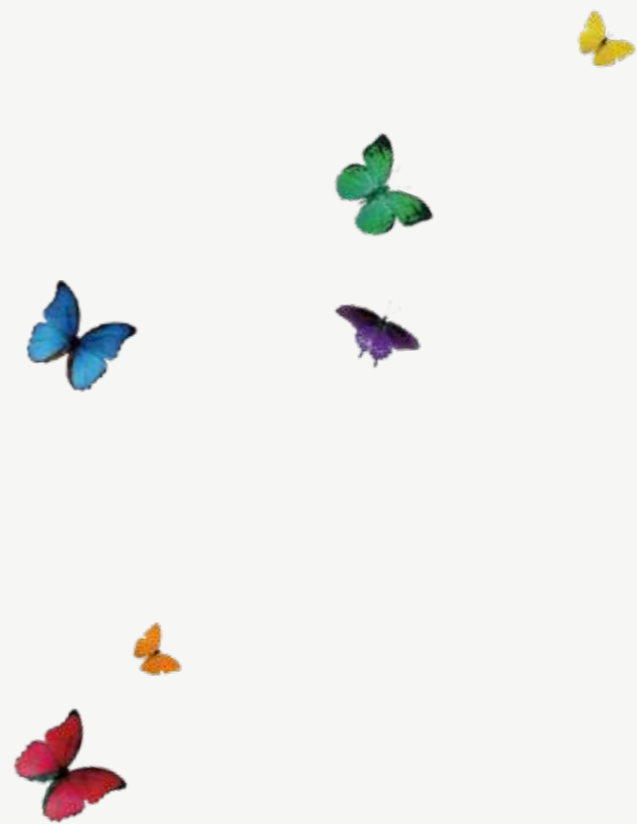
かかアド

KAGAWA UNIVERSITY AD Vol.035 2021 WINTER

香川大学広報室 〒760-8521 香川県高松市幸町1-1 087-832-1027 <https://www.kagawa-u.ac.jp/>

WELCOME TO KAGAWA-UNIV.

多彩な才能で羽ばたけ世界へ



WELCOME TO KAGAWA-UNIV.

香川大学

個性も価値観も可能性も、十人十色で当たり前 カラフルな未来が、ここから始まる

香川大学は2021年10月1日、四国の大学として初のD&I推進宣言を発表しました。
これまでの男女共同参画推進の取り組みからさらに一歩進んで、
より広い視野で多様性の実現を目指します。

Kakehi Yoshiyuki



Kurosawa Azusa



Shibata Junko



Fujimoto Tomoko



多彩な才能で
羽ばたけ世界へ

Make the Differences 

SPECIAL TALK SESSION

香川大学長
笥 善行

Kakehi Yoshiyuki

副理事・法学部 教授
男女共同参画推進室長

柴田 潤子

Shibata Junko

男女共同参画推進室
特命講師・コーディネーター

黒澤 あずさ

Kurosawa Azusa

理事・副学長
内部統制・ダイバーシティ
推進担当(非常勤)・弁護士

藤本 智子

Fujimoto Tomoko

すべての人が幸せに暮らせる社会へ 多様性はイノベーションの源 違っているほど、強くなる

D&I推進宣言に込めた思いと目指したい大学の在り方を
忌憚なく語り合いました。



孤独を安心に、相違を強さに変える

藤本 本学のD&I推進宣言は、学生、教職員など構成員一人一人の多様な個性や価値観、考え方が等しく尊重され、誰もが自分らしく活躍できる大学を目指すものです。D(ダイバーシティ)は多様性を意味し、性別・人種・国籍・障害・年齢などの属性だけでなく、性的指向・性自認、宗教、ライフスタイルなど、気づきにくい価値観なども含んでいます。I(インクルージョン)は包摂、包み込むことを意味し、違いを受け入れ、個性を認め、活かし、参加できる環境をつくる」とことと理解されます。通常はDのみにとどまりがちなのにIを含めて、多様性を尊重し共に活動する方針を示した点が特に先進的だと感じています。

笥 さらに先進的であろうと意識したわけではなく、自分たちがやるべきことを宣言し、退路を断つ意味の方が強いんですね。本学を受験してくれる高校生や社会人、その保護者、産業界や自治体など大学と協働して下さる皆さんをはじめ、大学にとってのステークホルダーとなる方々に我々が向かっている方向を示すことは、一緒に進んでいただく上で重要だし、受験生にとって一定のアピールになると期待もしています。

黒澤 ジェンダー平等は、SDGsの17項目すべてにかかわります。これまで男女共同参画推進室でやってきたことが活かされるのではないのでしょうか。

柴田 私の専門である法学は、法や組織の仕組み、よりよい秩序の在り方を分野横断的に研究する学問です。SDGsが向かっていく方向を法的にどのように支えていくかもこれからの課題ですね。

藤本 私はSDGsの「誰も取り残さない」という理念がとても重要だと思っています。私たちは多様なバックボーンと価値観を持ち、社会に受け入れられないと生きづらさや孤独を感じるものです。私は、本学の宣言には、その孤独を安心感や希望に変え、誰もが思い切り学び、働き、活躍して欲しいというメッセージも込められていると思います。それと同時に、本気で行動していく決意や覚悟も示していると感じています。

笥 学長として、本当の意味でのD&Iが大学の活力を上げると考えています。本学で4年ほど前から取り組んでいるデザイン思考教育は、多様なスキルグループがベースです。性別や人種、年齢がなるべく多様であればあるほど、イノベーションにつながりやすい。その観点から、D&Iを通じて「取り残さない」だけでなく「イノベーションのパワーを上げて多様かつ頑丈な組織を目指す」ねらいがあります。

藤本 その点で、大学は最もD&Iを取り込みやすい場ですね。本学は共学で、留学生や外国人教員も多く、今後は社会人学生も増えて、かなり多様性が出てくるのでは。

笥 旧工学部は女子学生が少なくていろいろな課題もあつたんですが、建築都市環境コース、造形メディアデザインコースができて女子学生の比率が上がると、ガラッと雰囲気が変わり、学部全体のイメージも一新されました。今以上に、優秀な女子学生たちが自信を持てるようにしていきたいと思っています。優秀な学生表彰を受けるのは圧倒的に女子が多いけれど、彼女たちが社会に出たらどうなるのだらうと、表彰状を与えながら心配になることもあります。日本社会自体が抱えている問題が、まだ根深い。

柴田 優秀な女子学生が多いのは私も感じるところで、学生たちには自立心をしっかり持って社会に出るようという話がよくします。大学まではあまり男女差で不利益を受けることはないものの、社会に出るとまだまだそうはいかないですから。少しずつ変わっていくとは思いますが。

黒澤 確かに今までいた組織に比べると、物事が気に進まない部分はあるかもしれませんが。ただ、D&Iはトップダウンとボトムアップの両方から進めていくべきで、学長が宣言されたことで指針が確立したのは重要だと思います。

笥 D&I推進の動きも、これまで柴田先生をはじめ男女共同参画推進室が進めてきた取り組みがあればこそです。

柴田 本学の男女共同参画推進プロジェクトは、個性や相違を尊重し、多様な人材が活躍できる環境づくりの環境です。特に力を入れてきたのは、まず女性研究者の活躍。女性研究者が生き生きと活躍できる大学なら、女子学生ももっと活躍できるでしょう。四国の5大学と企業、香川県ではアオイ電子株式会社と一緒に、ダイバーシティ研究環境調和推進プロジェクトを進めてきました。研究補助者をつけたり、論文投稿の費用援助をしたりといった女性研究者の研究環境改善活動を通じて、それなりに貢献できた手応えも感じるんです。それから、働き方改革。女性だけでなく全教職員に向けてワークライフバランスを推進するセミナーを開催しました。また「女性研究者の会」を立ち上げ、本学をよりよくするために必要なことを女性研究者の観点から検討する機会を持ち、情報交換や啓発活動を行っています。学生向けには、多様性や男女共同参画に重点を置いた授業を開講していることも挙げられますね。

笥 本学の女性研究者の割合は約2割、それでも国立大学の中ではやや高い方ですが、女性研究者が2割いるなら教授会の2割が女性でもいいはずなのに、なかなかそうならない。おそらく日本全国どの大学もそういう状況でしょう。研究者としてキャリアを積むには論文業績が必須で、女性はそれが積み上げられない環境にあるとすれば、D&Iを通じてサポートすべきところです。一体何が障害になっているんでしょうか？

柴田 研究者の2割が女性という本学の割合は、全国平均17%より若干高いけれど、女性の採用割合が四国の大学では低いかもしれません。

笥 その点については数年前から、同程度のポテンシャルを持つ男女が並んだ場合、なるべく女性を採用するようには正しつつあります。教育研究評議会という、各学部長と各学部から選出された評議員が中心となる、大学内で最も重要な会議があるんですが、

それほど大事な会議なのに、今までは柴田先生以外に女性メンバーがいまいませんでした。そこで2年前より、文系理系学部から1人ずつ、女性教員に評議会で意見を述べていただくことにし、良い効果が出ています。詳細は省きますが、先日でも女性ならではの発言をもとに、我々の方針が決まったのです。こういうことがどんどん起きてくるのではないかと楽しみです。

藤本 女性が増えることで違う角度から物事を見るチャンスが増えるのはいいですね。男性は、組織の中で画一化・統一化されている印象を受ける時があります。そういう時は私も「こういう考え方もある」と提案していこうと思っています。

黒澤 組織の中で女性が少ないと、その女性が「女性代表」みたいになってしまふ場合がありますから、女性が複数、それぞれ多様な人がいるのが重要です。

寛 自分では気がつかない盲点がお互いにあるでしょうから、それを補うには多様でなくてはならないですね。

学生の参画に手応え

藤本 今回の宣言で新たに盛り込まれた要素が2つあります。まず、女性だけではない多様な構成員の「ニーズ」を寄り添うこと。もう1つが、現行の取り組みを基盤にした全学横断的な体制を整備し、多様な構成員一人一人の困難な状況を見える化して、学内環境改善を図ることです。具体的には、全学構成員を対象に、D&Iに関する意識実態についてアンケートを実施



します。構成員のニーズを意識しながら、現場が抱えている二つの課題を丁寧に分けて検討し、環境整備のための企画立案を行います。また、SDGsの理念と同様、誰一人取り残さないために、コンシエルジュ機能を持った相談体制を確立します。些細な困りごと、どこに相談していいかわからないことを、まず相談してもらえらる窓口の整備ですね。相談内容に応じて適切な窓口につないたり、必要な専門機関、学内の部署と連携しながら、きめ細かく対応していく方針です。

寛 私から推進室にお願したのは、基本情報の収集を徹底することです。今は大きなリセットのチャンスで、最初の段階でなるべく情報を網羅しておきたい。取り残されかけている人ほど表立って声を上げにくく、課題を取り逃したまま整備すれば、永久に解決しませんからね。できれば、今まで気づいていなかった意見がたくさん上がってくるとうれしい。例えば、本学はムスリム学生のためにお祈り部屋を整備しましたが、そういう各論のレベル



で、気づいていないことが他にもいろいろあるのではないかと思っています。学園祭のミスコンテストの問題なども、ぜひ広く意見を聞いてみたいですね。

藤本 当たり前だと受け止めてきたことも、そこに違和感やモヤモヤを抱える人はいたと思います。今までは「そのような人はいない」と思っていたかもしれない。でも「知らない」と「いない」は全然違います。傷ついている人が本当にいないのか、いるのを知らないだけなのか、きちんと理解した方がよいと思っています。

寛 一方で、誰もが傷つかないように配慮すると、きわめて神経質な社会になる危険もはらんでいます。ミスコンもそういう類の問題として、学生にD&I宣言を浸透させる格好のテーマでもあるのでは？ 昨年、本学の学生たちと話す機会がありました。彼らはミスコンを、ルッキズムではなく内面を評価し大学愛を伝える場にしたという思いがあるようです。ミスコンをテーマに、先生方と学生たちの対談を企画したら面白いかもしれないですね。

黒澤 学生たちへの浸透という点では「コロナ禍で問題になった「生理の貧困」をテーマにしたという教育学部の学生が現れました。生理についてもっとみんなで考えよう」とプロジェクトを立ち上げたりもして、他にも、法学部の学生が性の多様性を学んで政策提言をしたいなど、いろいろな動きが生まれています。

柴田 ちょうど本学が宣言を出した頃のこと、一層はすみがついたといいますか、学生にも徐々に浸透している証ではないでしょうか。

寛 学生の参画といえば、国立大学協会が発行する雑誌で、大学の業務改善のDX化について、学生も交えてアイデアを出したことが大きく取り上げられました。少子高齢化が進むと、年齢差のある人たちが一緒に社会を改革していくことになり。多様であるほど物事が進みやすい、そのような未来を象徴するイメージになったのかも知れません。



柴田 DX化の環で相談事業のオンライン化を検討していますが、そこにも



寛 これからの地域の発展には女性

行政・企業と連携し地域の発展を支える

学生が関わってくれています。今の学生たちは本当に頼りになると思います。**寛** 学生たちの手でアプリ制作を内製化する取り組みもあります。高いお金を払って企業に外注するのではなく、使いやすいオーダーメイドのアプリを自分たちでつくるのです。これから厳しい時代がくるでしょうが、そのような社会で役に立つのはどういう人材か、かなり明確になりつつありますね。積極的に参加し、分野は問わず何でもやる学生たちの資質はとても必要です。職業も分野も超えてサバイブできる人ほど強いはず。**藤本** 私は、多様性を意識するためには、他者への温かいまなざし、広い心、想像力が必要だと思っています。インクルーシブな人材が増えれば、さらに魅力的な大学になりますし、そうであることを期待しています。

と外国人の力が不可欠ですが、まだ十分ではありません。大学としても、県の「女性が輝く香川づくり事業」と連携し、高等教育を通じて輝く人材を輩出するとともに、企業のグローバル化のサポートも進めています。

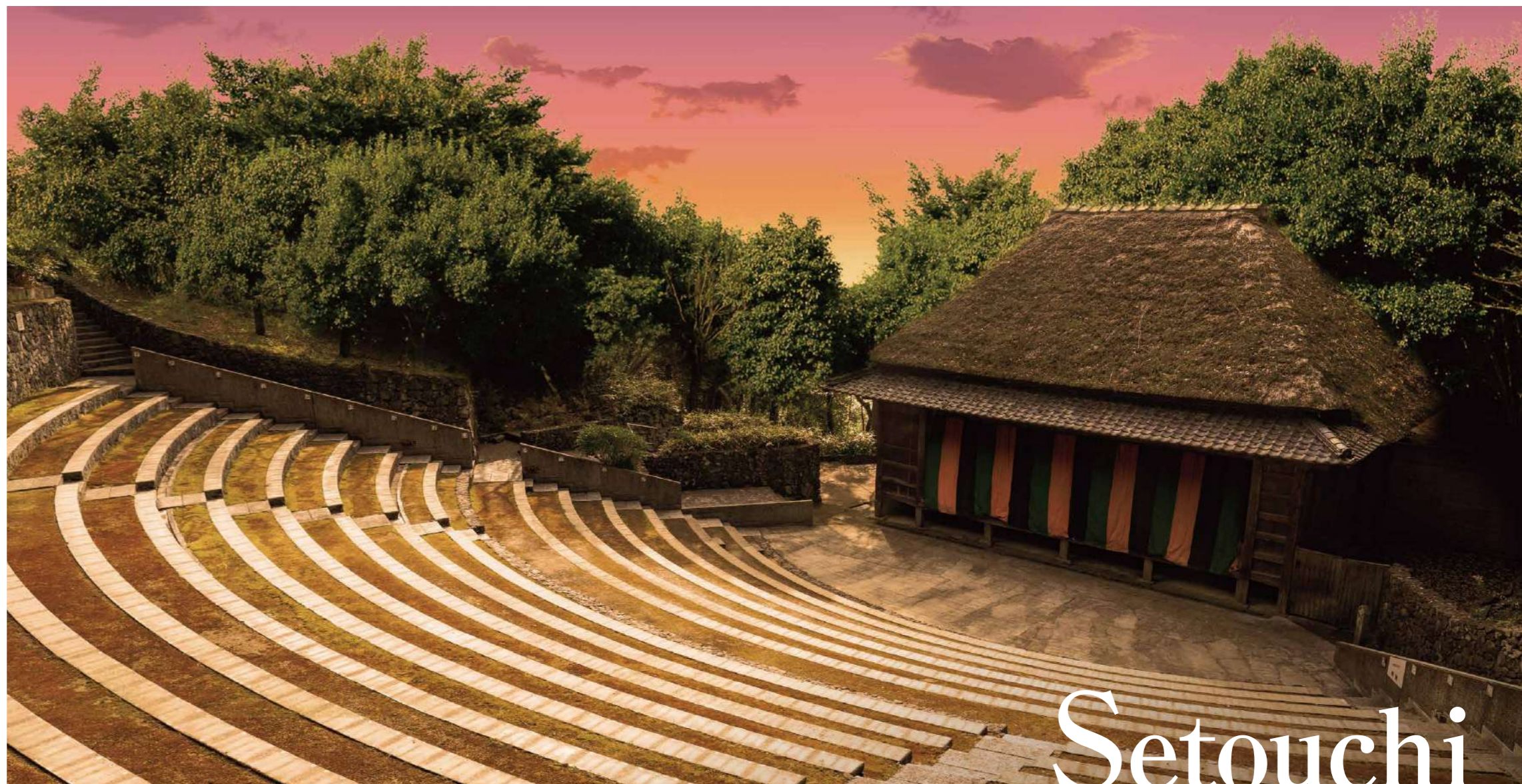
黒澤 県職員の大卒程度の採用者に占める女性の割合は40%を超え、全国でも上位にあります。今後どんな人材が育っていくとよいですね。**柴田** 企業連携では現在、アオイ電子において女性の活躍をサポートしていますが、サポートする地域の企業をもっと増やしたい思いもあります。

寛 世界的に見ると、理系の女子学生で修士博士号を取得して、企業でキャリアアップして、結婚や出産しても研究員としてキャリアをつなげる人が出てきています。しかし、そういう人は日本の企業にはまだ少ない。**黒澤** 対立意見も尊重しながら、建設的に進んでいければよいですね。気づかない・気づかれにくいといった問題にも通じますが、これまで当たり前と思われてきたことをいったんリセットしなくてはいけない時期が来ています。良い悪いの2択で結論付けるのではなく、その間のグラデーションを本学でも議論し探っていく必要があると思います。その中で、私たち二人一人の力を発揮できるのではないのでしょうか。

柴田 D&I推進を通じてキャンパスの雰囲気をもっとカラフルになって、楽しい可能性にあふれた大学になればよいと願っています。



四国から世界へ、 伝統的生活文化を発信



Setouchi Triennale 2022

これまで育んだ人の輪を
フルに活かす晴れ舞台

瀬戸内国際芸術祭2022

瀬戸内国際芸術祭2022春会期に、
香川大学が出演する
「瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト」。
若井健司教育学部副学部長が、
今回のプログラムに込めた思いを語ります。

瀬戸内仕事歌 Work songs of Setouchi & 四国最古の民話オペラ「二人奥方」

香川大学 瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト

2022年5月15日(日) 予定
15:00(1回目) 18:00(2回目)

代表: 若井 健司

場所: 四国村(四国民家博物館)

[https://www.kagawa-u.ac.jp/
cooperation-community/local/27076/28036/](https://www.kagawa-u.ac.jp/cooperation-community/local/27076/28036/)

最新の情報は
こちらのQRから



今回のプロジェクトは、四国村の農村歌舞伎舞台が会場となります。テーマは大きく2つ。四国で初めてのおペラ作品「二人奥方」の復活上演と、讃岐三白をはじめとする地域産業の生産現場で古くから歌われる「瀬戸内仕事歌」。私たちの伝統的な生活文化から生まれた音楽の再現です。現代芸術・美術に重きを置く瀬戸内国際芸術祭において、「音楽」「地域」を色濃く打ち出すプロジェクトが取り上げられるのは、なかなか珍しいのではないのでしょうか。

私は2004年から始まった「高松オペラシティ」構想の下、地域芸術の振興に尽力してきました。音楽家として活動しながら、瀬戸内海を舞台とする源平合戦絵巻オペラ3部作構想の実現をライフワークとしています。1作目のオペラ「扇の的」は、2014年サンポートホール高松開館10周年記念の初演から2018年ブルガリア国立歌劇場招聘公演まで、国内外で複数回の講演の機会を得て、いずれも成功を収めました。

地域に伝え残したい 「生」の音楽の息吹

大学生の頃の教育実習で、教科書にない授業をしようと思い、「讃岐の民謡」という1枚のレコードを手に入れたんです。ところがそれは民謡だけでなく、実際にその仕事をされている方の仕事歌が入っていて、芸術性を追求する音楽とはまた違った「生」の響きに、私はすっかり魅了されました。仕事歌から垣間見える過去の人々の文化や暮らしは、私のライフワークである瀬戸内で繰り広げられた源平合戦のオペラ制作にも深くつながっているように思います。

私たちが日頃耳にするのは「聞かせるための音楽」ばかりですが、仕事歌は「自分・仲間のために発する声の音楽」です。人間が作業に必要な、均一な身体リズムを刻むうちに、感情・願いが言葉・声として自然と生まれる。それが本来の歌の姿かもしれません。それらはまた、歌う人たちが口承でどんどん変化させて伝わっています。

私は音楽家としてオペラにかかわる傍ら、教育学部の教員として

私は2004年から始まった「高松オペラシティ」構想の下、地域芸術の振興に尽力してきました。音楽家として活動しながら、瀬戸内海を舞台とする源平合戦絵巻オペラ3部作構想の実現をライフワークとしています。1作目のオペラ「扇の的」は、2014年サンポートホール高松開館10周年記念の初演から2018年ブルガリア国立歌劇場招聘公演まで、国内外で複数回の講演の機会を得て、いずれも成功を収めました。

2021年2月には、舞台と客席の間に薄い「紗幕」を降ろしてオペラ映像を投影し、演者の生歌とともに臨場感を高める「オペラ・ガラス・スクリーンコンサート」を試験的に行い、新たな演出法として一定の手応えを感じているところ。この手法は、作品をより深く味わえるだけでなく、ステージをマスクのように覆うイメージなので、感染症対策として観客の不安も軽減できると考えています。同じ手法を芸術祭の舞台で採用するかはまた検討中ですが、こうした様々な活動を通じて培ったノウハウと、芸術文化振興に積極的な地域の人たちのつながりを、芸術祭でもしっかり活かすつもりです。コロナ禍で舞台表現の場が少なくなるとはいえ、野外舞台なら感染症対策もしやすいし、客席数も半分以下に抑えますから、実現性はかなり高いと思います。

四国村そのものも、現在エントラ

受け継がれた「声」が、 舞台の上でリアルに息づく

初演から半世紀経ったオペラと、
労働の場で歌い継がれた歌。
地域で生まれた「声」は
世界の人々の心にどう響くのか？



教育学部 副学部長
若井 健司
わかい けんじ
香川県高松市出身。専門は声楽・音楽教育・地域芸術。テノール歌手。四国二期会理事長。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。2020年から現職。



原和裁専門学院
院長
原 タエ子

香川大学教育学部附属
高松小学校講師
ソプラノ歌手
國方 里佳

原和裁専門学院での衣装合わせ



砂糖しめ機



四国村の農村歌舞台前で打ち合わせ
四国村事務局
門脇 聡子

屋島中学校合唱部をはじめ地域の幼稚園や芸術団体などにも広く協力してもらい、プロ・アマチュア一体でつくる舞台になります。歌い手には県内を代表する声楽家を起用し、香川大の教員・学生がアンサンブルや舞台美術を担当します。使用する舞台衣装は、主に『扇の的』などでもお世話になった、衣装の時代考証の見識の深い原和裁専門学校の原タエ子先生にご協力いただきます。日本の伝統的な着物文化に興味を持つ海外の人たちに向けた発信にもつながるでしょう。照明・音響スタッフは、四国村農村歌舞台

こうした仕事歌を教育現場に残したいとも思っているんです。昔の歌が少なくなり、かつての町の形や歴史が薄れていく中、仕事歌は貴重な存在。芸術性が伴う民謡と違って、仕事歌は歴史と生活そのものを象徴する、音楽だけではない総合学習の題材です。歌い手がほとんどいなくなってしまうと、せめてそれを見たことがある人たちがいる間に再現したい、というのが今回の試みです。

会場である四国村には、四国の各地から移築された伝統的な建物が点在し、中には砂糖しめ小屋やこぞ蒸し小屋、漁師の暮らしが垣間見える旧吉野家住宅など、四国の伝統的な地域産業に深くかかわるものも少なくありません。仕事歌が歌い継がれてきたであろう「場所」の息吹を身近に感じることができ、またとない舞台となるでしょう。

上演においては、牟礼町の石切り唄保存会、さぬき民謡保存会をはじめ、地域で伝統文化の保存に取り組み多くの皆さまのご協力をいただきます。「石切り唄」「砂糖しめ唄」「麦打ち唄」「地つき唄」「仁尾綱引き唄」「伊吹島舟唄」「浜曳き唄」を、当時の労働風景を思わせる演出とともに披露する予定です。最後に演じる塩づくりの仕事歌に現代舞踊を絡めて、オペ

野浩和、演出は香川演劇界の重鎮・八木亮三という布陣で、同会10周年記念公演として1965年に初演した記録が残る、おそらく四国最古のオペラ作品です。

私が八木さんから「初演後は一度も再演されていない。いつかもう一度上演したい」という熱い思いを聞いたのが、2003年のこと。そこから私自身もいろいろ調べて、2018年には論文を書き、学内での試験的再演を経て、今回の芸術祭でついに再演を目指せることになりました。少々教訓的な内容ではありますが、陰惨な話も多い四国の民話の中にはなかなか染み込んで痛快な場面が多く、アクションシーンなどもあって、芸術祭のような晴れの祭典にはぴったりの演目です。

ラへと自然に空間をつなげていく構想です。

仕事歌の再現に「出演いただく皆さまは、これまでの地域での保存活動において発信力や後継者の課題も感じておられるようすが、この芸術祭はローカルから一気に世界へ理解を広げていけるチャンスといえます。その意味でも、四国村という当時の生活環境がイメージしやすい場所で上演できるのはとても意義深いこと。瀬戸内という場所・土地に根差したコンテンツを違和感なく発信できると期待しています。

半世紀を経て甦る 四国最古のオペラ

舞台は四国の山中の小さなお城。ある朝お殿様が目覚めると、奥方が2人になっていたところから始まるオペラ「二人奥方」。まるで見分けのつかない2人のどちらがキツネの化けた姿なのか、大騒動の顛末は「なぜ四国にキツネがないのか」の由来につながっています。

40分ほどの短い作品で、四国の民話から新たな音楽芸術を発信しよう、と、半世紀前の県内の若手演奏家・愛好家が集まる「香川二期会」が制作したものです。脚本は人形劇の作家兼演出家・瀬川拓男、作曲は東京を拠点に創作オペラや人形劇オペラを手掛ける菅

舞台での公演事業にかかわった経験があり、ガラ・スクリム・コンサートも担当してくださった方。今回も組むことができ、非常に心強く思っています。

瀬戸内海に雄々と突き出した屋島のふもとの四国村という舞台に恵まれ、これまで育んできた地域の人の輪があつてこそ、今回のプログラムは実現します。私たちが生きる地域の伝統文化の価値を認め、新しく再生させるのも私たちの役目だとも感じています。まずはぜひとも芸術祭を成功させて、四国村でさらにたくさんの方々が花開いていくよう願っています。

協力団体一覧

- 公益財団法人四国家家博物館「四国村」／学校法人のぞみ学園のぞみ幼稚園(屋島地区)／高松市立屋島中学校合唱部／四国二期会／讃岐民謡保存会／石切り唄保存会／桑山会宇多津社／現代舞踊研究会「土曜族」／原和裁専門学院／認定NPO法人農村歌舞台伎囃座保存会／一般財団法人宇多津振興財団「うたづ海ホテル」他

The history of "Place"
Make the Differences

物語を生む「場所」を キャンパスに創造しよう

空間を再構築し、土地本来の力を活かして、
キャンパスの風景を「かけがえのない場所」に。
きっとここから、何かワクワクすることが起きるはず。

ケヤキのデッキ

02

After

2号館前の緑地は、駐輪場にする計画が持ち上がっていました。元は建物のエントランスだったものの、耐震改修で玄関の位置が変わったため中途半端な印象になっていたのです。

ここで目を引くのは、大きなケヤキの木。駐輪場になるとこれが切られてしまうこと、周辺に他の駐輪スペースがあることを踏まえて、西成教授はケヤキをシンボルツリーとするポケットパークを提案しました。「他の2カ所に比べると引き算の計画が難しい場所で、しっかり空間づくりを工夫する必要がありました」とのこと。

ケヤキの周囲は、たっぷりの木陰を天然の parasol に見立てたウッドデッキスペースに。少人数で落ち着けるテーブルや椅子の他に、2本の低いコンクリート壁がベンチの代わりにもなります。「ケヤキの魅力に初めて気づいた」という声だけでなく、建物や通り全体の雰囲気がすっきり明るく見える効果も生まれて、キャンパス風景そのものの印象を変えた好例となりました。

Before



After



Before



| Night Version |



After



Before



石あかりの小径

03

又信広場の整備と並行して「6号館南側の緑地の整備も」という声があり、現在の「石あかりの小径」の整備がスタートしました。西成教授は「又信広場のように人が集まってワイワイにぎわって...というよりも、ゆったり落ち着いた散歩スペースの方がふさわしいと感じました」と振り返ります。こちらもまた、土地の力を活かすリノベーションです。

この緑地の魅力は、もともと植わっている「木々」そのもの。新し

く植樹はせず芝生で地面を覆い、一枚岩の花こう岩で200メートルほどの石畳の遊歩道を敷いて、8メートルごとに庵治石の石あかりを設置しました。それまでほとんど獣道だったグラウンドとポプラ並木の間も、石を敷いた通路として整備。春は八重桜に彩られ、ベンチに座って本を片手に過ごしたくなる、静かで心地良い時間が流れる空間が生まれています。

この3例は、いずれも「場所」をつくる試みです。

コロナ禍では特に人のつながりが薄れ、孤独が社会問題となっています。人をつなぎ出来事を生む「場所」の力、空間デザインは、地域や大学の課題解決にも貢献できるはず。こうした場所づくりには今後も取り組みたいですね。

経済学部教授
西成 典久
にしなり のりひさ



東京都中野区出身。専門は都市計画・まちづくり。「場所のデザイン」をテーマに建築、人文、経営の融合プロジェクトに取り組む。本事業で高松市美しいまちづくり賞(設計者)、屋島山上ちようちんカフェで観光庁長官賞受賞。東京工業大学工学部卒業。同大学院修了(工学博士)。

又信広場

01

かつての幸町南キャンパス・講堂北側は、クロマツやサザンカが生い茂るうっそうとした緑地で、駐輪場として利用する学生以外はあまり人通りがありませんでした。2009年、工事に伴って一時的な駐車場としていたのを緑地に戻す際に「もっと緑地の方に人の流れを引き込めないか」と検討したのが、南キャンパスのリノベーション計画の始まりです。

大きなコンセプトは、「キャンパスに居心地のいい場所をつくり、学生や地域の人に愛着を持ってもらえる空間とする」。その第一歩となった又信広場の場合、重視したのは「今あるものを最大限活かして場所の力を解放する」イメージでした。余分なものを足さずに、引く・そぎ落とす空間デザインです。

埋もれていたクスノキを活かすために、クロマツは移植。緑に

「囲まれる」雰囲気をつくって、手前はテーブルや椅子を置いたくつろげるスペース、奥ははんなりとした築山のある庭園風の芝生としました。立て看板には地域の人も気軽に立ち寄りやすいポジティブなメッセージを掲載。駐輪場という「機能」のみが目立った空間が、さまざまな出来事起きる「場所」へと生まれ変わり、南西方向に見える峰山も借景として際立ちます。

2010年3月に竣工し、2011年度には高松市美しいまちづくり賞を受賞しました。「見た目だけでなく、学生のキャンパスライフにも影響を与えるものにしたかった。実際に『又信広場で一生の友達に会えた』といった学生のコメントも寄せられました」と、プロジェクトを主導した西成典久教授。今も思い思いに憩う学生たちの姿が絶えません。

ものっそ香大★チャレンジプログラム

大学構内の美化活動及び
地域との親交を深める活動

法学部

大学と地域をつなげる活動をすることをコンセプトに大学の環境改善活動に取り組んでいる。学内清掃や学内の緑地化活動として、季節の花や野菜を育て、大学菜園さながらの規模で楽しみながら栽培を行っている。

参加者数 **11人**
教育学部……2人
法学部……2人
経済学部……6人
創造工学部……1人

幸町キャンパスに学生につながるの場を作るプロジェクト
～小さな有機農園からコミュニティづくりを考える～

経済学部

幸町北キャンパスのアメニティ広場で有機野菜を育てている。『コロナ禍で失われた学生につながるの場所を取り戻す+有機野菜について知ってもらいたい』を目標に、可動式の椅子の設置や焚火イベントを実施する。

参加者数 **30人**
経済学部……30人

経済学部学生チャレンジプロジェクト

学び繋げるなえこの輪プロジェクト

地域連携学生委員会
なえこの

地域と学生をつなぐことで、学生のモチベーションを向上させることを目的とし、勉強会「なえすた」や社会人交流会「たねびと教室」の開催や地域の視察、取材活動を行っている。

参加者数 **17人**
経済学部……17人

高松盆栽の魅力発信!～若者に響くアプローチ～

Bonsai☆Girls
Project

世間が盆栽に対して抱いている「男性」「高齢者」「高価」といった親みにくいイメージとは正反対の女子大生が、プロの盆栽作家と、盆栽に興味を持っている人々をつなぐ架け橋となり、高松盆栽の認知度向上を目指す。

参加者数 **23人**
教育学部……1人
経済学部……21人
創造工学部……1人

災害から直島を守れ!～いま私たちにできること～

直島地域活性化
プロジェクト

直島で和cafeぐうの経営を中心に島内外で活動している。今年は防災イベントの開催を通じて学生の防災意識の向上を図るとともに、直島島民の方々に防災知識を身に付けていただくことを目的としている。

参加者数 **87人**
教育学部……3人
法学部……10人
経済学部……62人
創造工学部……10人
農学部……2人

ベンチでつなぐ小豆島

小豆島
プロジェクト

小豆島の地域住民とのコミュニケーションの機会を創出し、小豆島の観光や地域の魅力を発信することを目的としている。今年は小豆島島内に憩いの場となるベンチを設置する。

参加者数 **55人**
教育学部……2人
法学部……10人
経済学部……36人
農学部……7人

カマタマール讃岐との共同イベント

カマタマール讃岐との
共同イベント

行政や県内の企業の方々と共に、イベントの企画・運営を行うことで、大学と行政、民間の連携を強め、カマタマール讃岐の観客動員数の増加に貢献し、香川県の活性化に繋げることを目的としている。

参加者数 **10人**
経済学部……10人

耕そう地元愛!仏生山みんなで野菜プロジェクト

佛生山らほ
プロジェクト

多世代の仏生山地区の地域住民と交流を深め、相互理解を深めることで、仏生山の地域振興に貢献することを目的としている。今年は様々な世代(主に小学生)と香川大学生が主体となり、コミュニティ農園「こどもらほふぁーむ」を管理し野菜を育てる。

参加者数 **10人**
経済学部……5人
創造工学部……5人

海ごみ拾いツアー～私たちは香川の海ごみ海賊団!3～

香川大学学生ESD
プロジェクト SteepP

ESD(持続可能な開発についての教育)やSDGsの啓発を地域に向けて発信している。大町コミュニティセンター(牟礼町)の協力を頂き、牟礼町塩屋海岸と牟礼港で親子向けの海ごみ拾いイベントを複数回開催する。

参加者数 **23人**
教育学部……4人
法学部……5人
経済学部……5人
創造工学部……7人
農学部……2人

香川スイーツ探検隊～動画でエール!新たなお菓子屋さん発掘～

KAGAWA
Maker

「香川のお菓子で香川を盛り上げる」をコンセプトに活動している。その活動の一環として、香川県内にあるお菓子店の雰囲気やお菓子についてSNSを通じて情報発信している。

参加者数 **19人**
教育学部……1人
法学部……4人
経済学部……10人
農学部……4人

地域再発見の旅プロジェクト またたび

地域再発見の旅
プロジェクト またたび

あらゆる地域に視察に行き、学生と地域の住人と交流を深め、地域の魅力をバスツアーに組み込み、伝えている。そのツアーを通し、参加者が、またここに旅をしに行きたいと感じるような県内日帰りバスツアーづくりを琴平バス(株)と連携して企画・提案・運営している。

参加者数 **19人**
経済学部……19人

讃岐提灯で香川を照らすプロジェクト(TERASU)

TERASU

香川県の伝統工芸品である讃岐提灯を活かして、香川県の魅力を発信していくことを目的としている。地域や自治体、教育機関と連携してワークショップや展示を実施することが多く、新たな提灯のデザインにも挑戦している。

参加者数 **33人**
法学部……2人
経済学部……28人
創造工学部……2人
農学部……1人

坂出の魅力をガチャろう!

さかいで沙弥島
プロジェクト

瀬戸大橋記念館でのカフェ運営を中心に、坂出市の魅力を県内外に広めることを目的として活動している。坂出市と関連のある材料を使用した景品を自分たちで手作りし、瀬戸大橋記念館内にて、ガチャガチャの設置とその運用を行う。

参加者数 **30人**
経済学部……18人
創造工学部……8人
農学部……4人

フリーペーパーで魅力を発信

Kitahama
Lab

北浜地区全体の地域振興や観光振興を目指しているプロジェクトである。年2回フリーペーパーを発行し、より多くの人々に北浜の特徴や魅力を伝える。

参加者数 **13人**
教育学部……1人
経済学部……9人
創造工学部……3人

有機野菜魅力発信プロジェクト

ちよんまいガーデン
プロジェクト

有機野菜の魅力について、特に若い層を中心に情報発信することを目的としている。幸町北キャンパスのアメニティ広場(図書館北)の花壇で有機野菜を育て、魅力を発信する。

参加者数 **30人**
経済学部……30人



香大生の夢チャレンジプロジェクト

こどもらぼプロジェクト

経済学部

仏生山を盛り上げ、地元の子どもたちを中心とした地域の方と交流をすることで関わりを一層深めることを目的とした活動。ベンチづくりという非日常的な体験を通して、仏生山の良さを再認識し、魅力を知ってもらう。

参加者数 **19人**
経済学部……10人
創造工学部……9人

香大生のペットボトルキャップが世界を救う!?

法学部

学生のSDGs意識向上を目的に、学内複数か所のペットボトルキャップ回収箱設置、SDGsに関するポスター掲示、エコキャップ活動ののぼり設置を行っている。集まったキャップは定期的に回収・洗浄し、寄付する。

参加者数 **13人**
教育学部……3人
法学部……4人
経済学部……2人
創造工学部……4人

小豆島牛もぐもぐプロジェクト～芝浦工大と力を合わせて世界へ～

創造工学部

大学間協定を結んでいる「芝浦工業大学」の学生と共に、広報支援を通して小豆島オリブ牛の価値の向上をはかる。マーケティングリサーチやHPの作成、生産過程を巡るツアー計画などを行う。

参加者数 **4人**
法学部……1人
創造工学部……3人

香川大学学生ベンチャーファーム

農学部

農業に関わる学内4団体が協力して共同農園を運営。各団体の強みを最大限活かしながら、作物の生産から加工・流通までのプロセスを実践的に学ぶことが目標。子ども向けイベントの企画や商品開発を行う。

参加者数 **34人**
教育学部……1人
医学部……2人
創造工学部……1人
農学部……30人

香川の歴史と地域活性化のためのオーディオドラマ制作プロジェクト

地域マネジメント研究科

地域マネジメント研究科の授業で学んだ脚本知識を活かして、香川の魅力オーディオドラマで表現する。地域活性化の起爆剤となるエンタメコンテンツを作成。作品は、SNS等の媒体を駆使して県内外に広く発信する。

参加者数 **5人**
地域マネジメント研究科……5人

香川かけるラジオ～学生ラジオにおいてまい～

経済学部

毎月第4水曜日22時～FM高松にて、ラジオ番組「Art Time Junction」を制作・放送中。大学生の視点から県内の様々な情報を取り扱う。子どもセミナーや高校生との公開収録、他大学交流も行う。

参加者数 **10人**
経済学部……5人
創造工学部……3人
農学部……2人

防災「はじめる」プロジェクト～熊本の被災と復興を知る～

創造工学部

被災地の様子を伝え、災害を風化させずにこれからの防災につながる。動画制作、現地の様子や防災活動についてのパネル、小学生向け冊子を作成する。大学祭等各種イベントを通して防災を「はじめる」きっかけを作る。

参加者数 **7人**
創造工学部……7人

菓子木型をつなげ!～香川から全国へ～

経済学部

「お菓子で香川を盛り上げる」をコンセプトに、お菓子のイベント・商品開発・スイーツ巡検の3つの柱を中心に活動。今年度は、和三盆作り動画の作成・インスタライブ・和三盆作りの体験ワークショップを企画。

参加者数 **25人**
教育学部……1人
法学部……5人
経済学部……11人
創造工学部……1人
農学部……7人

「香川大学第3の人工衛星」打ち上げの夢への挑戦

創造工学部

過去に本学より打ち上げられた人工衛星に次ぎ、第3の人工衛星「SPIKA-1」の開発を行う。設計・製作に加え、宇宙関連イベントにて講演や展示を行う。運用中の衛星との通信を通して運用に向けた活動も行う。

参加者数 **10人**
創造工学部……8人
農学部……1人
工学研究科……1人



学生活動紹介

2021年度学生支援プロジェクト
採択事業一覧

#Noだけじゃない!料理で農の新しいイメージ(#KANO)を産み出そう

農学部

「食」を通して「農」をより身近に感じてもらい、「農」を活性化することが目的。野菜の栽培・収穫・調理・提供の全てを行うことで6次産業実現を目指すと共に、強みである「調理」の部分に力を入れ、料理の楽しみを共有。

参加者数 **12人**
農学部……12人

大学生が香川の農業を発信!KaNoHa Project

農学部

香川の農家の想いと農産物の魅力を香川の人に知ってもらう事を目標に活動。インタビューを通じて農産物が辿るルートの全てを学び、学生視点で感じた課題をもとに、SNSやラジオ、イベントを通じた情報発信を企画。

参加者数 **14人**
教育学部……1人
医学部……1人
創造工学部……1人
農学部……11人

第15回わくわくコンサート みんなで楽しむ音楽鑑賞会

教育学部

様々な理由で一般の音楽会に行くことが難しい子どもや保護者が気兼ねなく参加できる音楽鑑賞会を目指し、きめ細かな配慮を行うなど工夫を重ねている。「フランスに花開く異国文化」をテーマに開催する。

参加者数 **38人**
教育学部……26人
法学部……1人
経済学部……2人
医学部……3人
創造工学部……3人
農学部……3人

三俣診療班における診療活動の向上を目指して

医学部

例年、医師・看護師と共に山に登り、三俣山荘に併設されている診療所運営を手伝う。今年度新調したAEDを、一般登山客向けのポスター制作や大学での勉強会に役立て、正しく使用できる知識と技術の習得に努める。

参加者数 **34人**
医学部……34人

人々が集まる明るい場所を取り戻そう!高原城址再生プロジェクト

経済学部

直島で経営する和cafeぐうの裏山頂上付近にある高原城址を再び人々が集まる明るい場所にするため、整備を行う。2021年度は、広場の継続的な整備や看板・花壇の設置、ライトアップイベントを行う。

参加者数 **86人**
教育学部……3人
法学部……10人
経済学部……63人
創造工学部……8人
農学部……2人

「つなぐ」プロジェクト～無線通信による災害時の情報伝達を確実に行う活動～

創造工学部

災害時の情報伝達や無線通信の重要性を大学や地域・社会に向け発信することが主な目的。災害時に不可欠である無線の重要性の「発信」、人員の「育成」、無線の「活用」を行いつつ、2021年度は学内「連携」も重視。

参加者数 **10人**
法学部……1人
経済学部……1人
創造工学部……7人
農学部……1人

高校生に届け!～高松盆栽と香川大学の魅力～

経済学部

盆栽作家から知識を教わり、ワークショップで初心者に伝え、架け橋になることを目指す。高校生向けワークショップ、SNSなどの情報発信、盆栽に関するヒト・モノ・スポットを取材したフリーペーパーの作成も行う。

参加者数 **28人**
教育学部……1人
経済学部……26人
創造工学部……1人

さぬき再犯防止プロジェクト

法学部

地域の方が安心安全に暮らせる社会を作りだすために再犯を防止することを目的に、対象者の「居場所と出番」を作るイベントや現状を学ぶ研修会、閉ざされた世界を知るべく映画「プリズン・サークル」の自主上映会を行う。

参加者数 **29人**
法学部……29人

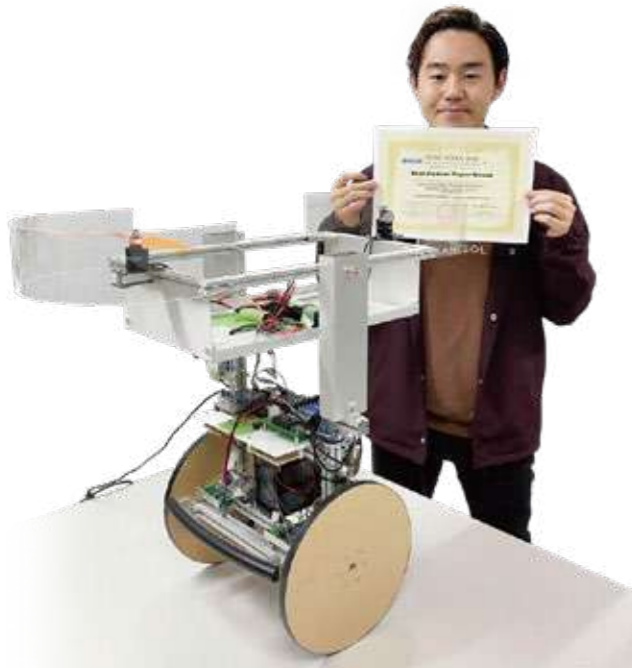
多彩な才能を活かした各学部の2021年度に表彰された内容をご紹介します。

Award Winner Introduction

受賞者紹介

5 工学研究科学生が新しい移動ロボットの制御システムを開発し最優秀学生論文賞を受賞

8月10日、坊寺琳太郎さん(大学院 工学研究科 2年生)は、最も優秀な学生論文であると認められた賞である「IEEE ICMA 2021 Best Student Paper Award」を受賞しました。ロボット工学や制御システムに関する最新の研究成果を発表する国際会議「IEEE ICMA 2021」にて、ドローンと車輪を組み合わせた新しい移動ロボット「ハードドローン倒立振り型搬送ロボット」の位置制御システムの開発について発表し、高い評価を得ました。



4 「児童問題研究会ひばり」が内閣府特命担当大臣表彰を受賞しました

11月25日、医学部サークル「児童問題研究会ひばり」が、1983年設立以来行っている、発達に困難を抱える子ども達へのボランティア活動、入院中の子ども達への学習支援等の社会貢献活動が認められ、「内閣府特命担当大臣表彰」を受賞しました。内閣府では、地域における子どもや若者の社会貢献活動において顕著な功績のあった個人又は団体を、「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」として内閣総理大臣及び内閣府特命担当大臣から表彰しています。



香川大学HP



7 日本ポリアミン学会 第12回年会において優秀発表賞を受賞

12月18日に東京理科大学薬学部でオンライン開催された日本ポリアミン学会 第12回年会において、石井友惟さん(大学院 農学研究科 2年生)が「優秀発表賞」を受賞しました。石井さんの研究発表は、「アグマチンによって誘導される分裂酵母由来 agm3⁺プロモーターの解析」というタイトルで、アグマチンの代謝に関わる酵素の遺伝子発現機構を報告し、当学会において高い評価を得ました。



香川大学HP



6 第72回日本電気泳動学会総会で優秀ポスター賞を受賞

7月14日～16日にWEB開催された第72回日本電気泳動学会総会にて、松本涼花さん(大学院 農学研究科 1年生)が「優秀ポスター賞」を受賞しました。「JDP2を介したインスリン遺伝子発現の促進と抑制」と題した研究では、インスリンの発現を正に制御する転写因子であるJDP2が他のインスリン転写因子であるATF2やMafAを介してインスリン発現のON-OFFを制御することを明らかにしました。この優秀ポスター賞は、発表者の中で優れた発表をした者を投票により選出して贈られる賞となっています。



香川大学HP



1 教育学部、創造工学部、香川大学防犯パトロール隊による「防犯ウォーキングアプリ『歩いてミイマイ』を活用した地域安全マップ作成活動」が第15回キッズデザイン賞を受賞



香川大学HP



9月29日、教育学部、創造工学部、防犯パトロール隊による、簡単な操作で地域安全マップを作成することができる「防犯ウォーキングアプリ『歩いてミイマイ』」を活用した地域安全マップ作成活動」が子どもの防犯意識の向上などの成果を挙げている点が高く評価され、「第15回キッズデザイン賞」(主催:特定非営利活動法人キッズデザイン協議会)を受賞しました。近年、子どもの犯罪被害を未然に防止することが求められ、その有効な方法として地域安全マップ作成活動が学校などで実施されてきています。

そこで、香川県警察本部の協力の下、簡単に地域安全マップを作成することができるアプリを開発しました。開発したアプリは、従来の活動では実現できなかった即時共有性とランキング機能によるゲーム性を兼ね備えています。さらに、短時間で危険・安全個所のキーワードを学ぶことができる学習コンテンツを開発し、これにより大幅に時間を短縮して地域安全マップを作成することが可能になりました。本アプリを活用し、香川大学防犯パトロール隊が防犯ボランティア活動の一環として、地域の学校などで地域安全マップ作成活動を行っています。

3 学生ESDプロジェクトSteePの「フードドライブ活動」が高松市社会福祉協議会より表彰されました

11月5日、学生ESDプロジェクトSteePが行った、家庭で使い切れない未使用食品を募り、食料を必要とされている方々に寄附する「フードドライブ活動」が評価され、高松市社会福祉協議会より表彰されました。学生ESDプロジェクトSteePは、地球温暖化や環境問題、食品ロス問題について取り組んでいる学生のプロジェクトチームです。香川大学の全学部横断で、現在18名のメンバーが地球温暖化などの研修を経て「香川県学生地球温暖化防止活動推進委員」として、全世代の方を対象にさまざまなイベントを開催しています。



2 日税連寄附講座で提出された優秀レポートの表彰式が行われました

4月7日、昨年度に開講された日本税理士会連合会(以下「日税連」という)による寄附講座である「(特)租税実務の実際と税理士の役割」で提出された優秀レポートの表彰式が行われました。各賞の受賞者は、以下のとおりです。



日税連会長賞 島田 優里さん(法学部法学科4年生)
四国税理士会会長賞 廣田 実来さん(法学部法学科4年生)
香川大学法学部長賞 寺見 壮太さん(法学部法学科4年生)
日税連会長賞のレポートは日税連の会報に、四国税理士会会長賞および法学部長賞のレポートは四国税理士会の会報に、それぞれ掲載されました。

香川大学HP



「総合格闘技」としての カーボンニュートラル

進行する地球温暖化を食い止めるために、「二酸化炭素を「出さない」社会の実現へ。分野も世代も超えて、一丸でリングに上がる。」



副理事・教育学部 教授
研究戦略室 副室長
寺尾 徹
Terao Toru

岐阜県多治見市出身。専門は気象学・気候学。地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム共同代表、日本気象学会関西地区理事。京都大学理学部卒業。同大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士後期課程卒業。2021年から現職。

気候変動の基礎研究で 温暖化防止に貢献

私の専門は気象学で、特にアジアモンスーン気候の変動メカニズムについて研究しています。特に雨は重要ですから、現地に雨量計も設置し、人工衛星のデータや全球的な気候データも用いて「雨の降り方」の変動の要因を明らかにしようとしています。現在の最先端の気候モデルは、地球全体で平均した温暖化予測については十分な信頼性があるものの、生活と関係の深い各地域のローカルな予測についてはまだまだ大きな不確実性があります。アジアモンスーン気候はアジア数十億人の生活に関連するのですが、複雑な地形の効果などもあって、気候変動によるその変動の予測の不確実性も特に大きくなっています。何とかアジアモンスーン気候の将来像を明らかにしようと模索しています。この分野では、日本もプロジェクトを引っ張ってきました。私も、2019年に始まったアジア降水研究計画(A si a P E X)という国際プロジェクトに、責任者として関わっています。

トータル(CN)を目指す取り組みの根拠を支える研究といえるでしょう。私の研究分野はメカニズムの解明と変動予測を提供する役割を果たしている一方で、温暖化の緩和と適応の技術や、その結果もたらされる多様な社会の変化についてはまた別の研究分野の研究者が役割を果たすことになるでしょう。気候変動への対応には、異なる分野の研究者たちがチームをつくり取り組む必要があります。私もこれまでベンガル平野のエビ養殖の急速な発展が地域の環境に与えている影響や、ため池の歴史や瀬戸内海の環境など讃岐・瀬戸内地域の環境などを対象に、様々な分野横断的研究テーマに関わってきましたが、いよいよ大学としてのCNへの取り組みを発展させる新たなチーム作りを進めたいですね。本学にも、スーパー珪藻や水素・アンモニア等の新エネルギー開発、建築物における省エネルギー技術や二酸化炭素削減の地域経済への影響分析など、優れた研究シーズがあります。大学の役割を大いに果たしていきたいと思っています。

現状維持では手遅れに 一丸でCNを目指そう

このたび真鍋淑郎先生が、二酸化炭素の増大による地球温暖化のメカニズムを詳細に解明するとともに、その定量的評価に成功したことなどを評価され、ノーベル物理学賞に輝きました。この温室効果をめぐる研究は、マリオット、フリーエ、ティンダル、

アレニウスら、17世紀までさかのぼる研究の歴史があります。真鍋先生の研究は、地球という対象を物理学的に解明することによりこの研究に基本的に決着をつける成果をあげたわけです。真鍋先生は、二酸化炭素が倍増すると、水蒸気の増加の効果も加味して地球表面の温度が2.36℃上昇することを示しました。この予測の正確さは、真鍋先生ご自身が先頭に立って開発を進めてきた、より精緻な気候モデルによって明確に証明されています。二酸化炭素濃度の増加が地球温暖化をもたらすことには、疑問の余地はありません。

地球温暖化を防止するには、二酸化炭素の排出をどの程度抑制すればよいのでしょうか？近年の地球温暖化に関する研究は、重要なことを明らかにしました。それは、二酸化炭素の排出量を多少抑制したくらいでは地表温度の上昇を抑えることはできない、ということなのです。地表温度の上昇は、主に産業革命以降に人類が排出してきた二酸化炭素量の「積算」によってほぼ決まります。二酸化炭素排出を桁違いに減らす、すなわちCNの実現ですが、地球温暖化を止めることはできないのです。CNはまさに待ったなしの課題です。

CN社会の実現に当たって、新エネルギーの発見などの画期的イノベーションは研究者としてとても夢を感じます。香川大発の画期的イノベーションを成し遂げてぜひ発信していきたいと考えています。一方で、CNの取り組みには、文系・理系を問わずあらゆる分野の研究が深く関わっています。プラスチックの利用を抑えていく課題や食品廃棄物の問題など、生活に深く根差した問題についても大小のイノベーションが必要です。地域にも様々なニーズがあり、ビジネスに活かそうという試みも多様に生まれています。大学の多様なシーズを総合して

社会の要請に機敏にこたえて研究・教育・地域貢献を進めていく大学の総合力を発揮していきたいと考えています。その意味では、CNの課題は「総合格闘技」のようなものだと感じています。大学全体で連携して主体的に取り組んで時代を作っていく気持ちで取り組んでいきたいですね。その点で、4月に新設される創発科学研究科はとても重要な役割を果たすでしょう。こういうチャンスこそ活かさなくては！と、意気込んでいます。

2℃を超えると永久凍土の融解や、氷床の大規模崩壊による大規模な海面上昇、極端な干ばつなど、いっそう深刻な影響が出てくるでしょう。二酸化炭素を増やしている主な要因は「化石燃料の燃焼」と「森林破壊」ですが、昨今よく取り上げられている脱プラスチックや省エネも、CNとつながっています。大学や政府がいろいろやっているから大丈夫だろう」と油断せず、皆さんもぜひ、日常的に使うエネルギーや日用品が「どこから来るのか」を意識して、できることから行動していきましょう。本学もそのきっかけづくりができたら、と思っています。

分野を超えて集結した 学内マッチングセミナー



研究シーズを結ぶ試み

12月7日、幸町キャンパス大会議室を発信拠点に、75名の研究者や学生たちがオンラインで一堂に会し、「カーボンニュートラルと気候変動の緩和・適応に係る研究者マッチングセミナー」を開催しました。

折しも、真鍋淑郎先生にノーベル物理学賞のメダルが授与された日。まずは寺尾先生が、真鍋先生の唱えた地球温暖化の予測モデルを踏まえて、温暖化のメカニズムと解明に至る歴史を紹介。ご自身の研究課題も交えつつ、基礎研究の立場から問題提起を行いました。

香川大は地域に密着した大学として、カーボンニュートラル(CN)が地域の環境に深く根ざした課題であることを認識し、地域と連携して県全体でCNを目指す取り組みの重要性を強調。また、学内で現在進行している研究の中から4つを例示して、「香川大に何ができるか」の方向性を示しました。

一見 和彦 (農学部・瀬戸内圏研究センター)

瀬戸内海沿岸の干潟域の機能的役割と、そこに生息する高増殖珪藻「スーパー珪藻」の生態・活用を研究。超高速で増える珪藻の特性を利用し、エネルギー分野や水産養殖分野への拡大を目指す。

奥村 幸彦 (創造工学部)

水素やアンモニアを活用した、二酸化炭素を排出しない新たな燃料・燃焼システムの開発を研究。水素を補助燃料としてアンモニアに着火する二酸化炭素フリーのバーナーを開発、完全燃焼に成功。水素やアンモニア燃料の普及に伴うインフラ整備の重要性も指摘。

山本 高広 (創造工学部)

家庭内のエネルギーや燃料電池コージェネレーションシステムなどの効率的な活用シミュレーションを通じて「建築物と設備の関連性」を研究。省エネを呼びかける社会の動きと効率的なエネルギー消費の関連を、行動変容の面からも追究。学内のキャンパスゼロカーボンの取り組みに貢献中。

玉置 哲也 (創造工学部)

建築・都市計画の分野で地球温暖化の経済的影響(温暖化が一般生活にどのくらいのダメージをもたらすか)を分析する評価モデルを研究。経済活動と成長を前提とした二酸化炭素削減方法の模索とともに、瀬戸内圏を対象とした観光学と産業・エネルギー生産のバランスも考える。

参加者からの積極的な発信や意見交換も進み、
大いに盛り上がった約2時間。
これから本格的に取り組む学内連携に向けて、
期待を込めた第一歩となりました。

こちらのQRから
YouTube動画を
チェック!



ジオを軸とした
香川の魅力を発信!
**香川大学っぽい
YouTube!!**

KAGAWA UNIVERSITY NEW SYSTEM

香川大学は2021年10月1日から新体制でスタートしました!

2021.10.1 START



01 香川大学長
笈善行

02 理事・副学長(教育担当)
今井田克己

03 理事・副学長
(研究・産官学連携・教員評価担当)
片岡郁雄

04 理事・副学長
(企画・評価・附属学校園担当)
鳴倉剛

05 理事・副学長
(総務・労務担当)
真鍋光輝

06 理事・副学長
(財務・施設担当)
川池秀文

07 理事・副学長(非常勤)
(内部統制・タバ・ハイシニア推進担当)
弁護士
藤本智子

08 副学長
(学生支援・広報・特命担当)
山神眞一

09 副学長
(危機管理・学術・特命担当)
吉田秀典

10 副学長
(情報・研究・IR・特命担当)
松木則夫

11 副学長
(産官学連携・特命担当)
城下悦夫

12 副学長
(国際戦略・グローバル環境整備担当)
原直行

13 副学長(医療担当)
門脇則光

14 監事
根ヶ山和幸

15 監事(非常勤)
安井順子



役員・副学長略歴



障がい者、オープンリーLGBT、いろんな個性を持つ人たちがみんな自然体で話し合える、のびのびした雰囲気のおフィス

高松を障がい者活躍の先進地に！

株式会社スミセイハーモニー
代表取締役社長
鎌田 恵徳
Kamata Yoshinori
(経済学部 1984年卒)



対等な人間だから、配慮はするけれど遠慮はしない。



武道の精神に通じる 社会人の心の在り方

香川大学時代の思い出といえば、中学からずっと続けていた剣道に打ち込んだこと。私たちが3年生になるまでは監督がいなかったのですが、4年生の天下でした。来年はやると我々が自由になれるぞーと思っていたところへ、4つ年上の山神眞一先生(現香川大学副学長)が初代監督に就任されることになって、指導方針も大きく変わったりしてよく衝突をしたのも懐かしい思い出です。

当時は経済農教育の3学部に加えて、法学部ができて間もない頃でした。剣道部は同期がわずか5人。主将を務めた4年時に、23年生と共に大会に出ました。順調に勝ち進んで中四国代表となり、日本武道館での全国大会でベスト16に入賞しました。この成績は今でも破られていないと聞いています。

剣道を通じて、武道の「礼を尽くす」精神が自然と身についたのでしょ

社会で重要なのは 学力より総合力

卒業と同時に住友生命に入社し、生命保険販売に携わって30年余り、支部長本社室長高松を含む支社長本部長等も担当しました。社内学問もなく学歴も問われず平等に上を目指せる環境だったので、頑張れば評価されるのが面白くて、学力とは「受験勉強にどれほど集中できたか」、心の在り方や総合的な判断力とは「まったく別物だと感じたものです。社会人として大事なものはむしろ総合力の方で、勉強以外にも大切なものがあることは、学生にも知っておいてほしい。

すべての人が持つ力を発揮することが理想ですが、現実には考え方に個人差があり、頑張れと言われるとやる気がなくなる人もいますよね。最大の力を発揮するためには心の在り方がとても大事です。仕事にしても、「相手の心が読めたらどんなにいいか」と考えたり、わからなくても意識し考えることで近づけることができると知り、「こうしたら、相手はどんな反応をする

か？」をうまくつかめたら、いろんなことがうまくいくようになる。武道も同じで「剣道の道はすべての道に通ず」ですね。

企業や大学と連携し 障がい者に活躍の道を

グループ会社である株式会社スミセイハーモニーの代表の話を読んだのが5年前。私自身、障がいのある子供がいることもありぜひやりたいと思いました。

当社は「働く意欲のある障がい者に雇用創出提供すること」を目的に設立された特例子会社で、280人の職員のうち230人が障がい者です。

企業理念は「互いに個性・障がい特性を理解、配慮し持てる力を発揮し、やりがいと達成感を感じられる風土づくり」、そして「人として成長し地域社会で活躍できるための教育機会の提供」です。成長のキーワードは「人の気持ちが変わる事」です。障がいのある無にかかわらず自己中心ではなく、常識やマナーを身につけて他人の心に寄り添える人になることを大切にします。

全国に展開する第2歩として、2020年に高松オフィスを設立しました。良く知る郷土だから成功できると決断しました。4名でスタートしたオフィスも現在7名の障がい者と2名の支援員がいます。

地方都市はまだ障がい者理解が遅れている部分もあり、障がい者をオープンに出来ない閉鎖的なところが残っています。

高松を「ダイバーシティモデル都市」「マイシティに優しい都市づくり」の先進地とし、障がい者も気兼ねなく

堂々と活躍できるよう地域の感覚や風土を変えたいんです。

そのためには、地域の企業や大学行政が体になって取り組む必要があります。障がい者雇用は積極的な企業はまだまだ少ないですが、郷土愛あふれる経営者は多く、中小企業家同友会の多様性委員会のメンバーと共に啓発に努めています。

講師の機会も増え、全国から声もかかるようになってきました。香川大学でもチャンスがあればーと思っています。また臨床心理や看護の学生たちにも、「障がい者支援」という就活の選択肢もあることを知ってもらい、障がい者の社会活躍を支える人材を増やすことも目標の一つです。

発達障がいのある学生も各大学に1割弱程度いるのでは？と言われていました。

就職において自己理解・受容は重要であり、在学中に出来るようになるれば就活にまずく学生も減ると思います。「新卒」に関し企業と大学の就労支援連携は重要で、特に大学の役割は重要だと思います。

よく「障がい者にどう接したらいいか」と聞かれますが、普通でいいんですよ。配慮はするけど、特別視も遠慮もしたくない。D&I(ダイバーシティ&インクルージョン)という言葉の本質を考えなくてはなりません。「障がいがあるから助けてあげよう」は全然ダイバーじゃない。みんな同じ人間だという感覚で、あくまで「困っていたら」手を差し伸べればいいんです。障がい者だろうと健常者だろうと、根性論に拠らず「苦手なことはできる人に回して、自分が得意なこと頑張る」のが当たり前。そんな社会をここから実現していきたいですね。

時を超えて子どもたちを見守る 天使の像

戦後の再建に伴って誕生した、2人の天使たち。そこに込められた思いを探っていきましょう。



恵心館のシンボルとなった現在の姿(縦:約3.6m×横:約1.8m)

偶然見つかった 制作時の貴重な記録

香川大学教育学部附属高松小学校の一角に建つ「恵心館」の1階には、児童らが給食をとるランチルームがあります。その南側の壁面に掲げられた、大きな白い石膏レリーフ。年少少女の姿をした2人の天使の周囲にハトが舞い、慈愛に満ちた表情とともに、どこか荘厳さも感じさせる作品です。

その制作風景を写した貴重な写真※1が、同小学校の副校長室で近年見つかりました。「私が副校長になってすぐ、部屋の掃除をしていたところ、ロッカーの後ろから古い紙にくるまれて出てきたんです。開いてみて驚きました」と、大嶋和彦副校長。制作スケッチ※2は額装されて長らく会議室に飾ってありますが、写真を目にしたのは初めてだったと振り返ります。「こんなところにあるなんて、誰も気づかなかったんでしょね」。

モノクロの写真の中、こちらに背を向けて天使の像の前に立つのは、彫刻家・新田藤太郎。1888年に香川県で生まれ、高松工芸高校から東京美術学校(現・東京藝術大学)に進み、文展や帝展で入選を重ねて審査員も務めました。太平洋戦争中は代表作とされる国威発揚の像「肉弾三勇士」をはじめ、数多くの銅像を手掛けています。金

す。親戚の子が附属高松小学校に通っていたこともあり、「材料費だけでいいよ」と快諾したとか。

小学校に残るスケッチには、藤太郎の署名とともに「昭和廿八年秋」「香川大学附属中小学校」「破風彫刻」といった文字が記されています。このスケッチは制作依頼者の一人が藤太郎から譲り受け、のちに学校に寄贈されたもの。「正確なところはわかりませんが、制作風景の写真も、おそらくスケッチと同時期に本校へ渡ったものと思われ」と大嶋副校長。原型が出来上がった際に香西町のアトリエの庭先で写したものだとは回顧する記録も残っています。

体育館の落成は1953年10月16日。当時まだ珍しかったという鉄筋コンクリートの体育館の壁面を天使の像が飾りました。以来、1983年に恵心館が完成するまで、2人の天使は運動場で駆ける児童らを見守ることになります。

やさしい心の象徴として

恵心館に移設されるに当たって、長年の風雨でいたんだ像は丁寧に修復されました。「恵心館」の名前にも「天使のように温かい思いやりのある、やさしい心の人間になってほしい」という思いが込められていて、今や同館を象徴する作品となっています。

制作スケッチによると、像のサ

属供出などで失われた像も多いものの、戦後は香川県に戻って制作を続け、高松市立中央公園の「菊池寛」「玉椿象谷」像など、今も県内各地に作品が残っています。藤太郎はなぜ、天使の像を手掛けることになったのでしょうか。



※1) 原型完成時に撮影されたという写真

体育館の壁面で 30年の時を重ねて

制作時期は、戦後の復興期にさかのぼります。同校百年史によれば、空襲で焼け落ちた小中学校校舎の再建が進み、1953年秋には現在の第2体育館が完成を迎えようとしていました。そんな折、「体育館の正面に何か裝飾がほしい」というアイデアが持ち上がり、戦争で香西町に疎開してきていた藤太郎に白羽の矢が立ちま

イスは「市拾式尺」「高サ6尺」、つまり約3・6×1・8メートル。ランチルーム南壁の大半を占める圧倒的な存在感ですが、自然と空間に溶け込んでやさしい雰囲気醸してもいます。体育館の壁面に掲げられていた時と違って、細部まで間近で眺めることができ、天使の深いまなざしの奥まで覗き込めるかのようです。

「なぜ天使をモチーフにしたのかはわかりません。でも、天使の周りにはばたくハトは平和の象徴でもありますから、戦争を経験した藤太郎が像に込めた思いが、なんだか垣間見えるような気がします」と大嶋副校長。これからも、天使たちは子どもたちの成長を静かに見守り続けることでしょう。

学内でも作品を発見！



幸町南キャンパスの南7号館ロータリー付近にある隈本繁吉先生(香川大学経済学部的前身である高松高等商業学校 初代校長)の胸像も、実は新田藤太郎の作品なんです。今回の取材に先立って気づいた時は、広報スタッフも鳥肌が立つほど興奮しました。



※2) 制作用のスケッチ。「破風彫刻下図」の文字が読み取れる

磯打千雅子特命准教授らの「チームサツキ」が
令和3年防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞



11月5日、磯打千雅子特命准教授(四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構)が2018年7月豪雨で被災した倉敷市真備町の住民有志とともに取り組む団体「チームサツキ」の活動が、「令和3年防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。

チームサツキは、2018年7月西日本豪雨で被災した倉敷市真備町において、クラウドファンディングを活用して、被災者が地域に戻れるように賃貸住宅を改修し、住民の住まい・交流の拠点として整備するとともに、災害時は一時避難場所として、建物上階への避難を容易にするための坂路の整備に取り組んでいます。創意工夫に富み、他地域への波及効果が認められる活動を全国に発信しているこの取組は、防災意識の啓発活動として高く評価されました。



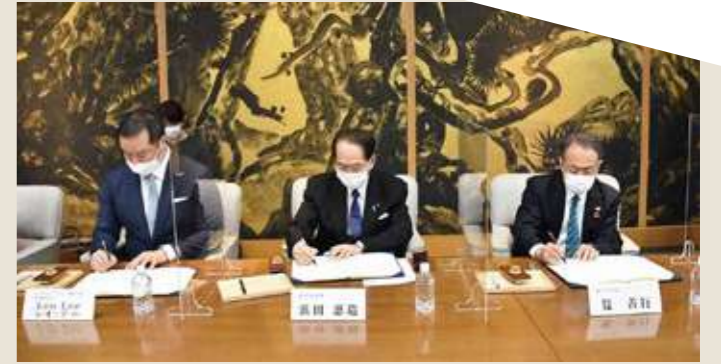
上田夏生教授が国際学会で
学会賞を受賞しました

上田夏生教授(医学部 生体分子医学講座 生化学)は、6月21~24日にオンラインで開催された第31回国際カンナビノイド学会(International Cannabinoid Research Society)で、「Mechoulam賞(学会賞)」を受賞しました。2000年に創設された同賞を日本人研究者が受賞するのは初めてのことです。

乱用薬物の一種である大麻(マリファナ)が興奮を引き起こす仕組みが調べられた結果、「エンドカンナビノイド・システム」と呼ばれる情報伝達系が体内に発見され、大麻の精神作用は、大麻に含まれるカンナビノイドと呼ばれる成分が脳などに存在する受容体に結合し、この情報伝達系を攪乱することで生じることが明らかにされています。本学会は650名以上の会員を擁する国際学術団体で、カンナビノイドやエンドカンナビノイド・システム等についての研究の振興を目的としています。上田教授は、25年以上に渡り、ヒトの体内に存在するマリファナ様物質(エンドカンナビノイド)の合成や分解を触媒する酵素の解明に取り組み、新しい酵素の発見やcDNAクローニングなど、一連の成果が評価されました。

香川県及びノバルティスファーマ株式会社との
循環器病対策に関する産官学連携協定を締結しました

12月16日、香川県庁において、ノバルティスファーマ株式会社、香川県、本学の3者間での「循環器病対策に関する産官学連携協定」を締結しました。本協定は、3者が連携協力し、循環器病の予防及び対策に関する取組を実施することにより、県民の健康寿命の延伸、循環器病につながる生活習慣病対策、小児生活習慣病予防健診を通して次世代からの虚血性心疾患予防、循環器病による死亡率の低下、循環器病患者のQOLの向上を目的とするものです。香川県における死因は「悪性新生物」に次いで「心疾患」が多いとされ、その大きな要因の一つに糖尿病などの生活習慣病があります。特に香川県では、長年、糖尿病患者が多く、県民病とも言われています。本協定の取組である、循環器病につながる生活習慣病対策や正しい知識の普及啓発、医療・福祉サービス提供体制の充実などを行うことで、地域の皆様の健康増進に繋がることが期待されます。



徳田雅明名誉教授に
タイ国立チェンマイ大学から
名誉博士号(医学)の称号が
授与されました



1月14日、本学の大学間協定校であり、海外教育研究拠点校3校の一つとして重点的に交流を継続実施しているタイ国立チェンマイ大学から、徳田雅明名誉教授(インターナショナルオフィス特命教授)に「名誉博士号(医学)(Honorary Doctoral Degree in Medicine)」の称号が授与されました。徳田名誉教授は、医学部国際交流委員会委員長及び国際戦略・グローバル環境整備担当副学長として、合同シンポジウム等の開催、学生・教員の人事交流、希少糖の生活習慣病に関する共同研究、胎児心拍モニターを用いた遠隔医療の共同実施、医学部附属病院での研修交流事業等、教育・研究・社会貢献の分野で、長年にわたりチェンマイ大学と共同事業を実施し、両大学の良好な関係を強化するとともに、チェンマイ大学ならびにチェンマイ地域コミュニティに多大な貢献をしたと評価されました。今回の名誉博士号授与により、今後の両大学の更なる協同的發展が期待されます。

高尾英邦教授の研究グループが
Journal of Robotics and Mechatronics誌の
The Best Paper Award 2021を受賞



12月22日、高尾英邦教授(創造工学部 機械システム工学領域長・微細構造デバイス統合研究センター長)の研究グループがJournal of Robotics and

Mechatronics 誌で発表した論文が、同誌における「The Best Paper Award 2021」を受賞しました。本賞は、前年を通じてJournal of Robotics and Mechatronics誌に掲載された全原著論文(2020年は全114件)の中から、Editorial Boardによる厳正なる審査を経て1件の論文を選出するものです。高尾教授の研究グループは、人間の指先が持つ繊細な触覚を上回る能力を示す高性能触覚センサーにより、従来は識別できなかった繊細な違いを持つ対象の手触り感を識別可能としました。現在も医学、美容、健康、介護技術の分野をはじめとする様々な共同研究を展開しており、人間の手が持つ触覚の限界を超える新しいセンシング技術の創出に取り組んでいます。

希少糖最前線



産官学連携による長年の取組の成果である希少糖D-アルロース(D-ブシコース)純品が、日本国内で全国販売されることとなりました。希少糖D-アルロースは、ゼロキロカロリーで砂糖の7割程度の甘味度を有しており、抗肥満、血圧上昇抑制作用、脂肪燃焼促進効果などの生理機能が、本学を中心とした産官学連携研究により認められています。10月6日、戦略パートナー企業の松谷化学工業株式会社は、希少糖D-アルロースをブランド名「ASTRAEA(アストレア)」として全国販売を開始。さらに、様々な産官学連携研究を取りまとめた研究レビューを有効性根拠として、希少糖D-アルロースの結晶を用いた粉末清涼飲料「アストレア プロ」を機能性表示食品として消費者庁へ申請し、11月17日に届出が受理されました。

香川大学 寛学長とあいおいニッセイ
同和損害保険株式会社 金杉社長による対談を実施



8月18日、FM香川にて放送中のプログラム「香川大学 NEXT STAGE」の特別企画として、寛学長とあいおいニッセイ同和損害保険株式会社 金杉社長による対談を行いました。香川大学とあいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、現在、全国の標準的中核市である高松市と香川県西部地域の主要市である三豊市をフィールドとした交通インフラの在り方や維持について検討し、快適な移動空間・移動手段を模索すべく、「地域社会の課題解決とMaaS等に係る研究—2050年のWell-beingの高い地域社会の構築を目指して—」と題した共同研究を実施しています。今回の対談では、連携協定の締結に込めたそれぞれの思い、共同研究を通じた地域課題への取組、大学と企業の人事交流などについて意見交換を行い、大変貴重で有意義な対談となりました。

文部科学省「情報ひろば」において企画展示を実施しました



文部科学省「情報ひろば」企画展示室において、11月12日~12月20日にかけて、「うまげながわ感じてみまいる!うどん県住みます学生プロジェクト」について展示を行いました。本事業では、東京圏と地方圏の複数の大学が学生の対流等に関して組織的に連携するとともに、東京圏の学生が地方の特色や魅力等を経験できる取組を推進することで、地方への新しい人の流れを生むとともに、地域に根差した人材の育成を図り、地方創生の実現につなげることを目指しています。プログラムの実施を通して、大学間連携だけでなく、自治体や地元企業との連携も活発化してきています。各方面からの支援によってプログラムの充実が図られるとともに、新たな成果が目に見える形で現れ始めており、今回の展示では本学が本プロジェクトにおいて果たす連携ハブとしての役割をパネルや動画を交えて紹介しました。



石原良純氏によるキャリア支援特別授業を開催!!
『気象予報士に挑戦したワケ』~良純流、キャリアの描き方~

11月24日、「香川大学生のためのキャリア支援特別授業」が幸町キャンパスで開かれました。第1部は、俳優・気象予報士として活躍されている石原良純氏の特別講義でした。芸能界に入った後、気象予報士になった経験や今後社会に出ていく中で大事なこと、心構えなど、学生の目線に立ったお話をしていただきました。第2部では、石原氏と松本真由美先生(東京大学客員教授)による「2050年日本の姿とは?~カーボンニュートラルとエネルギーの未来を考える~」というタイトルでトークセッションが行われました。この特別授業は、キャリア理論や事例を学ぶだけでなく、様々な刺激を受けてもらおうと、キャリア教育の一環として毎年行われている人気の授業です。

Next Innovation.

香川大学発 研究シーズ活用レポート

カーボンニュートラル実現を通じて描く「共創」ビジョン
地球温暖化を食い止めるために、何ができるのか？

国のコアリシジョンに参画

近年の私たちの暮らしは、深刻化する気候変動に大きく影響されています。地球温暖化は、ノーベル物理学賞受賞者・真鍋淑郎先生の予測モデル通りに進行しており、生き物の生態を変容させ、ひいては人間社会も左右すること…。瀬戸内地域では、気温や水温の上昇により農業や漁業には直接的な影響が現れています。

2021年11月にイギリスで開かれたCOP26では、地球の平均気温の上昇を1.5度に抑える目標に向け、世界的に努力することが合意されました。国際的に気候変動への関心が高まる中、日本政府も2050年までにカーボンニュートラル(CN)の実現を目指す方針を掲げています。CNとは、二酸化炭素の発生と吸収・利用の均衡がとれて、土ゼロの状態であること。地球温暖化をこれ以上進行させない社会の実現です。これは、SDGs達成に向けての最重要課題の一つです。では、そこに大学はどう関わるのでしょうか。

昨年7月、文部科学省・環境省・経済産業省の呼びかけにより「カー

ボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリシジョン」が設立されました。コアリシジョンとは共同体・連携体といった意味で、行政・企業・地域・国際的連携のもと、教育研究機関としての大学の機能や発信力を高めることを目的として、「ゼロカーボン・キャンパス」「地域ゼロカーボン」「イノベーション」「人材育成」「国際連携・協力」の5つのワーキンググループ(WG)が設置されました。本学は、現時点で前者2つに参画しています。

学内外で 様々な取り組みを展開

「ゼロカーボン・キャンパス」WGでは、2022年までにキャンパスのゼロカーボン化につながる先進的モデルの方向性を示し、それに関する事例や課題、具体的な方法について考えていきます。「地域ゼロカーボン」WGでは、自治体や企業と連携し、地域のニーズを踏まえた知見の共有や研究チームの創設・展開で課題解決を目指します。

香川大には、これ以前から取り組んできた実績があります。教育

研究はもちろんのこと、大学全体での環境整備に関する取り組みは「環境報告書」に毎年まとめ、実験機器等の多いキャンパスの消費電力削減や発電設備改善なども積極的に進めてきました。それらを含め大きな枠組みとして推進するのは今回初めての試みです。

CN実現に向けて昨年12月に学内マッチングセミナーを開催し、異なる分野の研究者間で各々の研究を共有する場を設けました。一人一人が行っている研究を分野横断的に結びつけ、新たなシーズや応用場面を生み出すチャンスです。効率的な交通・物流の仕組みづくりや海の生態系の活用、自然林の保全といった二酸化炭素の排出制限・吸収システムの活用から、そもそも二酸化炭素を発生させない「新たな燃焼システムやエネルギーの基礎研究」まで、様々な事例が上がり、今後連携による進展が加速されると期待しています。「学外に向けた発信」として、シンポジウムも計画しています。

一方、人材育成も大きな柱です。教育場面におけるCNでは「これから何をしていくべきか」「自分はこの

ように貢献できるか」を考えていきます。また、附属学校の生徒や本学の学生に向け、環境に関する授業を行う他、公開講座等で、市民の皆さんへの情報提供も予定しています。

SDGsを全学的に推進

本学は、新たにSDGsの達成に向け、全学的に取組みを推進することとし、タスクフォースを立ち上げ、現在進行中のものを取りまとめ、香川大学のホームページで公表しました。その一環として、「カーボンニュートラル」や「気候変動対応」についても、様々なアクションが繰り広げられています。是非ご覧ください。今後SDGsに関する市民活動に協力し、地域と連携を深め、持続可能な社会の実現を目指します。

社会の仕組みを変える きっかけを生む場所に

文部科学省は、今後の国立大学

等の施設整備の方針として、「イノベーション・コンパス」というコンセプトを提示しています。キャンパス内のどこにでもイノベーションの種はあり、起点になりうることを考え、今まで相互に関わりのなかったところに多様なマッチングの場を設けイノベーションを起こして、社会

の仕組みそのものを変えていく「共創」という考え方です。たとえ一つは目新しいものではなくても、つながることで仕組み自体が変われば世の中が大きく変わります。コロナ禍でオンラインツールが普及して、もはや「距離」に関係なくネットさえあれば同時に動ける「時代に

なりました。現地に行けない不便さの代わりに「より近く」なった部分もあります。今はまだ対面ではなくてはできないことも、これから新しい技術が進展し、違和感なくオンラインでこなせるようになるはず。「カーボンニュートラル」や「気候変動」は、全世界で協働して対応する

課題です。オンラインも活用しながら、「コロナ禍を乗り越え、前進したい」と思います。SDGsの先にある世界と地域の姿を思いつつ、学内外の様々な活動をつなぐ「出会いの場」としての役割を果たしてまいります。ご期待ください。

片岡 郁雄 KATAOKA IKUO

理事・副学長(研究・産官学連携・教員評価担当)

岡山県倉敷市出身。専門は果樹園芸学・育種学。農学博士。「さぬきキウイっこ®」を育成。京都大学農学部農学科卒業。同大学院修士課程修了。2017年から現職。

カーボンニュートラルに関連する取り組みの例(抜粋)

ゼロカーボン・キャンパス関連

- ◎新エネルギー導入による環境負荷軽減／太陽光発電設備の導入
- ◎環境に配慮した移動や輸送
- ◎環境コミュニケーション／環境報告書の発行・配布

地域ゼロカーボン関連

- ◎交通資本によるCO₂排出と生産に関する効率性分析(創造工学部)
- ◎沿岸環境における干潟域の機能的役割の解明(瀬戸内圏研究センター・農学部)
- ◎モウソウチクの里山林の炭素吸収・貯蔵および有機物分解(農学部)



詳しい情報は香川大学のホームページをご覧ください。

https://www.kagawa-u.ac.jp/sdgs_action/

《研究シーズ活用のご相談は》
香川大学 産学連携・知的財産センター

〒760-8521 香川県高松市幸町1-1

TEL.087-832-1672(代) FAX.087-832-1673

本学研究者の研究成果は、HPより確認できます。

<https://www.kagawa-u.ac.jp/faculty/centers/23894/>





学長賞
「Rice planting season (taue) in Kagawa.」

広報室長賞
「夏へ」

アイデア賞
「水をかける少女」

アイデア賞
「銀杏落ちて新しき道を歩かん」

特別賞
「徳は孤ならず必ず隣あり」

Photo Contest 2021 Part 2

第5回 香川大学フォトコンテスト2021

作品募集
香川大学内を撮影してInstagramで投稿しよう！
香川大学の魅力を伝える写真。被写体は風景、建物、人物、サークル・部活動の様子等、何でもOK。ただし、個人が特定される人物が含まれる場合、必ずご本人(被写体)の承諾を得た上で応募してください。応募者本人が撮影した、未発表の作品に限ります。

募集期間 2021.12.14(火) ▶ 2022.3.7(月)
応募資格 香川大学生、卒業生、教職員など、どなたでもご参加いただけます。
問い合わせ先
香川大学広報室
TEL 087-832-1027
Email kouhou-h@kagawa-u.ac.jp



香川大学支援基金

To the Future
香川大学の未来を一緒に創っていきませんか
ご寄附の方法が選べます
■クレジットカードや振込用紙など寄附方法をお選びいただけます。
ご利用いただけるクレジットカードの種類は支援基金のホームページをご覧ください。

香川大学から感謝を込めて
■ご寄附いただいた方全員
ご了承を得て、ご芳名を大学ホームページ等に掲載いたします。
※ご支援いただいた方は税制上優遇措置が受けられます。

■個人10万円以上、法人・団体30万円以上寄附された方
感謝状と記念品の贈呈 / 銘板による顕彰
ご芳名の銘板を学内に掲示し、未永く顕彰いたします。

詳しくは、香川大学支援基金ホームページ
<https://www.kagawa-u.ac.jp/kikin/>

最新の大学情報をチェック！

パートナーのみなさまをご紹介します！

かがアド

KAGAWA UNIVERSITY AD Vol.035 2021 WINTER THE 35th. ISSUE

FM香川 I ♥ RADIO 786

住友生命グループ 障がい者の社会活躍を積極的に応援します

あなたの未来を強くする

住友生命 高松支社
087-821-4443
〒760-0017 香川県高松市番町1丁目6-1

住友生命グループ 特例子会社
株式会社 スミセイハーモニー
高松オフィス
087-821-7251
高松NKビル

RICOH

リコージャパン株式会社 香川支社

香川から新しい糖 世界に羽ばたく 希少糖

希少糖とは？
その名のとおり希少な糖。自然界にごくわずしか存在しない糖ですが、種類は多く約50種類も存在することがわかっています。

無限の可能性！
香川大学が、世界で初めてすべての希少糖の生産方法を確立。「これまでの糖の常識をくつがえす」さまざまな作用が明らかになりました。食品をはじめとして、医薬、工業、化学、植物分野に至るまで、現在も多様な研究が進められています。

希少糖「D-プシコース(アルロース)」のはたらき

- 1 カロリーゼロ
- 2 食後血糖の上昇をゆるやかに
- 3 内臓脂肪の蓄積を抑える
- 4 動脈硬化になりにくい
- 5 虫歯になりにくい
- 6 抗酸化性が高まる

※プシコースは海外ではアルロースと呼ばれています。

いい糖 11月10日は希少糖の日

一般社団法人 希少糖普及協会
香川県高松市番町1-2-19 安西ビル4階
TEL (087)814-3333 FAX (087)802-1755

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

MS&AD INSURANCE GROUP

高松支店
〒760-0042 香川県高松市大工町1-1
☎ 087-822-6901